

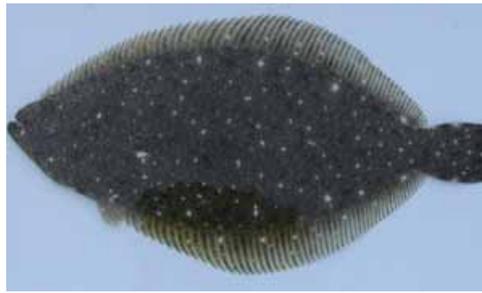
平成19年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 ヒラメ

学名 *Paralichthys olivaceus*

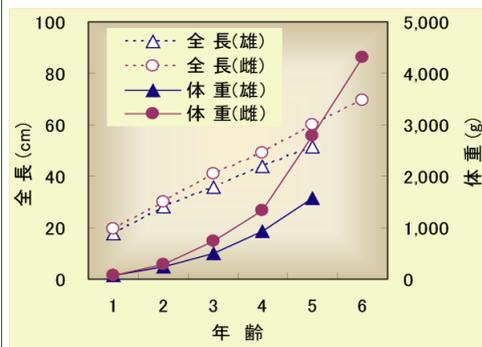
系群名 日本海北・中部系群

担当水研 日本海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 10歳以上
 成熟開始年齢: 雄2歳、雌3歳
 産卵期・産卵場: 春～夏季(4～7月)、水深50m以浅
 索餌期・索餌場: 秋～冬季(8～3月)、水深150m以浅
 食性: 着底後はアミ類など、その後魚類が主食、他にはイカ類、エビ類等
 捕食者: 稚魚期にはより大型のヒラメをはじめマゴチ、オニオコゼ、アナハゼ、イシガニ、エビジャコ等

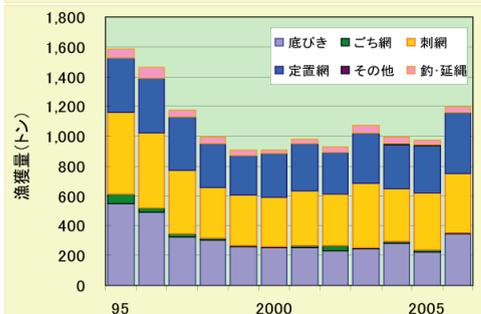
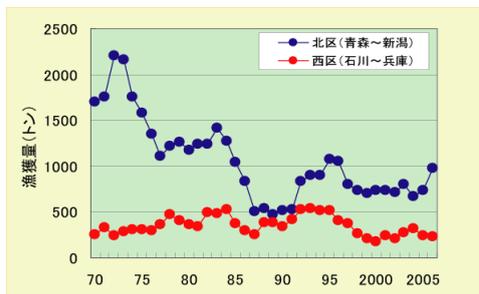
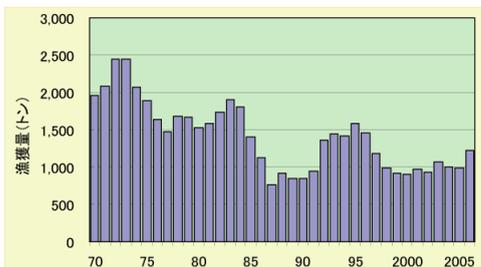


漁業の特徴

本種は沿岸性の高級魚で、栽培漁業の代表的対象種である。日本海沿岸の北～中部の各府県(青森県～兵庫県)で主に刺し網、定置網、底びき網などで漁獲されている。

漁獲の動向

本系群の漁獲量は1970年以降においては11～12年周期で増減を繰り返してきた。近年では1988年以降は増加傾向にあったが、1995年の1,581トンとピークに減少に転じ、2000年には909トンと過去35年間で4番目に低い漁獲量を記録した。その後925～1,070トンの間で増減を繰り返してきたが、2006年の漁獲量(概算値)は前年より230トン(23%)増加して1,216トンとなった。

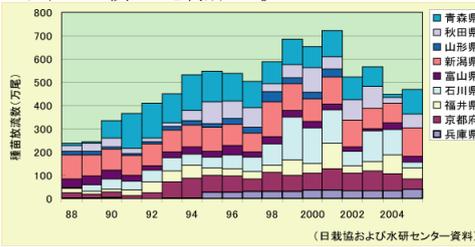


資源評価法

漁獲量の経年変化を基本に、漁獲努力量およびCPUEの推移も参考にして資源の評価を行った。本系群においては能登半島がヒラメの移動の障壁になっていることが知られており、富山県以北と石川県以西では漁獲量の水準や動向は必ずしも一致しない。そのため、北区(青森県日本海側から富山県)と西区(石川県から兵庫県)とに分けて資源水準と動向の判断およびABC算定を行った。

資源状態

漁獲量の推移から判断した資源状態は、漁獲量が1,200～1,800トンであれば中位でそれ以上なら高位、それ以下であれば低位であると判断した。2006年は前年より230トン増加して1,216トン(概算値)であり、前年までの低位から中位に好転した。また、動向は増加と判断した。海域別では、北区においては900～1,400トンで中位、西区においては300～400トンで中位と判断することとし、北区は983トンで中位、西区は233トンで低位となった。動向は、漁獲量が前年より243トン、前々年より309トン増加した北区では増加、過去5年間の漁獲量が211～323トンで推移しており、2006年は前年より13トン減少して233トンであった西区では横ばいと判断した。



管理方策

北区では資源水準と動向が中位で増加であるが、これは2004ならびに2005年級群の加入が良好であったことによると考えられる。将来的に資源量を高い水準で安定させるためには産卵親魚の確保が重要であり、これらの年級群が成熟する2008年までは漁獲量を現状レベルに留めることが望ましいと判断した。一方、資源水準と動向が低位で横ばいの西区では、漁獲量を削減して資源の回復を促すことが望ましいと判断した。

	2008年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit 北区	980トン	C2006	—	—
ABClimit 西区	210トン	0.8・0.8Cave5-yr	—	—
ABClimit 北区	790トン	0.8C2006	—	—
ABClimit 西区	160トン	0.8Cave5-yr	—	—

資源評価のまとめ

- 漁獲量の推移より資源の動向を判断
- 1998年以降の漁獲量は900～1,100トンの低水準であったが、2006年には1,216トンに増加した
- 資源水準と動向は、北区では中位で増加、西区では低位で横ばい、系群全体としては中位で増加

管理方策のまとめ

- 北区では、親魚量の確保のために、漁獲量を現状レベルに留めることが望ましい
- 西区では、資源の回復を促すために、漁獲量を削減することが望ましい
- 漁獲物の多くを1歳魚が占めており、若齢魚保護のための有効な対策が必要である

資源評価は毎年更新されます。